
午後2時55分～4時。第10挿話「さまよえる岩」は19の「セクション」から構成されているが、その途中にはダブリンの他の場所（その多くは他の「セクション」）において**同時刻**に起こったことが「挿入」されている（interpolationもしくはintrusion）と呼ばれる。ジョイス自身が「幕間(Entr'acte)」と呼んだように(Letters I 149)、第10挿話は『ユリシーズ』全体の間地点であり、第9挿話までの「初期のスタイル(initial style)」と第11挿話以降の実験的な文体を繋ぐという意味においても、非常に意義深い挿話である。

① ジョン・コンミー神父(U-Y 10.373-81)

「アッパー・ガーディナー通り聖フランシスコ・ザビエル教会」¹(377)²の「司祭館の階段」(373)を下りて、歩き始めるコンミー神父の内面の描写から始まる。マーティン・カニングムの手紙に書かれた依頼に応えるべく、本日埋葬されたディグナムの長男、パトリック・ディグナム（セクション⑧にも登場）の受け入れを要請するために、神父はアーティンにあるオブライエン孤児院へ向かう。マウントジョイ広場から、グレート・チャールズ通り、北環状道路、北ストランド通りと歩みを進める中、神父はディヴィッド・シーヒー下院議員夫人やベルヴェディアの小学生3人、ウィリアム・ギャラハーなどから「挨拶」をされ、彼もまた挨拶を返す。ニューカメン橋から市外行きの電車に乗り、ハウス街道停留所で降りた際にも、「車掌に挨拶をされ、挨拶を返す」(379)。マラハイド道路を歩きながら、彼は罪を犯した歴史上の人物に思いを馳せ、さらには校長を務めていたクロンゴウズ・カレッジの野原を歩いていたときのことを回顧する。聖務日課として3時に唱える午後の祈り、「九時課」を歩きながら無言で唱えていると、垣根の隙間から若い男女が現れ、「挨拶」を受けた神父は彼らに祝福を与える。ほどなく、聖務日課書のページをめくるとそこには“Sin”の文字があった（『詩篇』119篇161節～168節を表す、ヘブライ語のアルファベット第22字「シン」であり、同時に「罪(sin)」が含意されている）。



▶ジョン・コンミー（1847～1910）：イエズス会の神父。1904年当時は、聖フランシスコ・ザビエル教会の修道院長。スティーヴンが通ったクロンゴウズ・ウッド・カレッジ（キルデア州）の校長や、ベルヴェディア・カレッジの学事長を歴任した。³

¹ 右の写真は下記のサイトより: <http://www.joyceproject.com/notes/100010xavier.htm/>

² ここでページ数を書いたように、まず「司祭館」が描かれ、その後これが「アッパー・ガーディナー通り聖フランシスコ・ザビエル教会」のものであるとわかる。このような手法は他のセクションでも用いられ、時には店や建物の名前のみで場所（通り）を確定するように要請されているセクションもある。ここからも、本挿話において場所の特定が極めて難解であることが窺える。

³ 人物紹介に関しては、集英社文庫『ユリシーズ』Iの「『ユリシーズ』人物案内」（655～83頁）を参考にした。なお略号Dは『ダブリナーズ』を表す。

第10回 2022年の『ユリシーズ』—スティーヴンズの読書会（2021年2月21日）

Plot and Summary: Ep. 10: Wandering Rocks

②コーニー・ケラハー(U-Y 10.381-82)

ノース・ストランド通りの「H・J・オニール葬儀店」(377)で働くケラハーが、干草の葉っぱを噛みながらぼんやり外を眺めていると、「巡回中の巡查」(377/381)が声をかけてきて、「ゆうべ例のあいつを見たんだけどさ」と内部情報をケラハーに提供する。

▶**コーニーリアス・ケラハー**：オニール葬儀店の支配人だが、秘密裏に警察の密偵をしているのではないか、という噂がある。

③一本足の水兵 (U-Y 10.382-83)

エックルズ通りを、松葉杖をついた一本足の水平が歩いてくる。「ネルソンの死」を歌いながら立ち止まると、おもむろに空いた窓から「むっちりしたむき出しのおおらかな腕」が現れ、硬貨を投げる。

④デダラス家の娘たち(U-Y 10.383-85)

キャブラのセント・ピーターズ台地7番地にあるデダラス家の家に、ケイティとデダラスが戻ってくる。台所に入ると、マギーが石鹼水を入れた鍋でシャツを消毒していた。マギーから本が質に入れられなかったことを聞かされ、腹を空かせたブーディは豆スープにパンをひたし、「天にましますわれらの父よ」と言うが、神と実父の両方を冒瀆した言葉は、ケイティのためにスープをすくうマギーからの叱責を受ける。

▶**マギー／ブーディ／ケイティ・デダラス**：スティーヴンの妹たち。

⑤ブレイゼス・ボイラン(U-Y 10.385-87)

グラフトン・ストリート63番地にあるソーントンの果物屋兼花屋でボイランは、モリーの手土産として梨と桃を購入する。売り子の娘の襟ぐりを見ながら、彼は「まだ雛(A young pullet)」(U10.327)と考える（『ユリシーズ』全体で彼の内面が直接描かれるのはこの言葉だけである）。

⑥スティーヴン・デダラスとアルミダーノ・アルティフォーニ(U-Y 10.387-88)

カレッジ・グリーンでスティーヴンは、イタリア人の音楽教師のアルティフォーニとイタリア語で会話をしている。アルティフォーニは、この若者が良い声を持ちながらも音楽の道に進まないことを嘆き、考えを変えるよう促す。「考えてみます」とだけ答えるスティーヴンと握手を交わし、マエストロはドーキー行の電車に乗ろうと急ぐが、乗り損なってしまう。

▶**アルミダーノ・アルティフォーニ**：イタリア人の音楽教師。スティーヴンの才能を惜しみ、音楽を続けるよう励ます。

⑦ミス・ダン(U-Y 10.389-90)

ドリアー通り沿いのボイルンのオフィスで、秘書のダン嬢は彼がいないのをいいことにウィルキー・コリンズの『白衣の女』を仕事に読んでいたようである。仕事に戻るべくタイプライターに向かった彼女は、「一九〇四年六月十六日」と打つも、やはり仕事をする気になれずポスターをぼんやり見つめていると、「電話が荒っぽく耳もとで鳴」る。ボイルンは彼女にベルファストとリヴァプールへのチケットを用意するよう指示し、一方彼女はボイルンにレネハンが四時にオーモンド・ホテルで会いたがっていることを伝える。

⑧ネッド・ランバートとJ・J・オモロイとヒュー・C・ラヴ師(U-Y 10.390-93)

マリア修道院通り（キャペル通り近く）にかつてあった聖マリア修道院の会議場(chapter house)⁴は、当時種子穀物商アレクサンダー商会が倉庫として利用していた。商会で働くランバートは、一人の客人にその遺跡を案内している。フィッツジェラルド家の本を書くための調査をすべくキルデア州からやって来た、アイルランド国教会のラヴ師である。その最中に、オモロイ（ジャック）がやって来て、ラヴ師が後日この史跡の写真を撮るために再訪することがランバートとの間で決まる。

- ▶エドワード・J・ランバート：愛称ネッド。種子穀物商アレクサンダー商会に勤めているが、副大法官の甥であるため、その振る舞いは経営者然としている。
- ▶J・J・オモロイ：肺病を患い零落した、法廷弁護士。第7挿話ではクロフォードに借金を申し込むが叶わなかったため、この挿話でネッドのもとを訪れている。
- ▶ヒュー・C・ヘインズ・ラヴ：若い牧師。フィッツジェラルド家の本を書いている。セクション⑭で「おっさんカウリー」の大家であることが判明する。



⁴ 写真は下記のサイトより: https://en.wikipedia.org/wiki/St._Mary%27s_Abbey,_Dublin#Abbey_became_a_private_residence.

第10回 2022年の『ユリシーズ』—スティーヴンズの読書会（2021年2月21日）

Plot and Summary: Ep. 10: Wandering Rocks

⑨トム・ロッチフォード、おおせ鼻フリン、T・レネハン、C・P・マッコイ(U-Y 10.393-98)

クラプトン・コート敷地内でトムがミュージック・ホールでどの演目が上演中かを示す発明品をフリン、レネハン、マッコイに見せている。ボイランにこの装置の売り込みたいというトムの意向を当人に伝えることを受け合い、レネハンとマッコイと共にその場を離れる。ウェリントン河岸へ向かう途中、賭け屋のライナムに立ち寄ったレネハンは、バンタム・ライアンズが「誰に聞いたのかでんで勝ち目のないぼろ馬に賭けるとこ」を目撃し、その直後には、露天商の台車に乗った古本を漁るブルームを目撃する。それで思い出したのか、レネハンはマッコイに、その昔ブルーム夫妻と一緒に馬車に乗ったとき、隣に座ったモリーのふくよかな肉体に触れてひどく興奮したことを笑いながら語る。

▶**T・レネハン**：フリーマンズ・ジャーナル社の週刊スポーツ紙『スポーツ』の記者。たかり屋。D「二人の伊達男」にも登場。

▶**C・P・マッコイ**：職を転々としたのち市の検視官の秘書として働いている。妻ファニーは歌手であるという点で、ブルームと境遇が似ている。D「恩寵」にも登場。

⑩レオポルド・ブルーム(U-Y 10.398-401)

「マーチャント・アーチ」⁵の下に出された露天商の古本を漁るブルームが描かれる。モリーが次に読むものとして何冊かの本を吟味したのちに、ブルームの目に留まったのは『罪の甘露(*Sweets of Sin*)』(U10.606)であった。ぺらぺらとページをめくり拾い読みをする彼は、小説の中の扇情的な言葉（「女の唇は男の唇に吸いついて」「女のむちむちした肉付き！」）に大いに興奮し、購入することにする。店主は本をぽんと叩き、「こいつは面白いぜ」と言う。



⑪ディリー・デダラスとサイモン・デダラス(U-Y 10.401-04)

バチャラーズ・ウォーク沿いのディロン競売場の前で、ディリー・デダラス⁶が父サイモンからお金をせびる場面が描かれる。サイモンは最初に1シリング、さらに娘からせびられて2ペンス手渡す。父は「母さんが死んでからというもの、こまっしゃくれた娘ばかりになって」と悪態をつくものの、その言葉には彼一流の毒を含んだユーモアが感じられ、娘もまた臆することなく父から何とか金を引き出そうとする。この一種の〈たくましさ〉は、セクション⑬のステイーヴンの内的独白に見られる悲愴さ、あるいは「イヴリン」の主人公との八方塞がりの境遇とは好対照をなしている。

▶**ディリー・デダラス**：ステイーヴンの妹。この後、セクション⑬で再登場する。

⁵ 写真は下記のサイトより：<https://www.dreamstime.com/photos-images/merchants-arch-dublin.html/>

⁶ 第8挿話でブルームは「デダラスの娘がまだディロン競売場の前にいる」(U-Y 8.262、強調引用者)と述べていることから、第7挿話でブルームがキーズ広告の件で「バチャラーズ・ウォークまでひとっ走り」(U-Y 7.224)したときにも彼女を目撃していたことになる

第10回 2022年の『ユリシーズ』—スティーヴンズの読書会（2021年2月21日）

Plot and Summary: Ep. 10: Wandering Rocks

⑫ トム・カーナン(U-Y 10.404-07)

ジェイムズ通りを沿って東に歩みを進めるカーナンは、茶と酒を扱う商人のクリミンズ氏から注文を取り付けたことに大満足の様子である。自慢の古着のフロック・コートのことを考え、「着てるものが物を言う」と思う。そのような上機嫌のなかでも、彼はロバート・エメット(1778～1803)やエドワード・フィッツジェラルド(1763～1798)など反英闘争で命を落とした愛国者たちのことを考えるが、それにも拘わらずセクションの最後ではリフィー川北岸のペムブルク通りを走る総督の騎馬行列を目撃できなかったことを口惜しく思う。

▶**トム・カーナン**：茶輸入商会（プルブルック・ロバートソン）の外交員。Dの「恩寵」において、プロテスタントからカトリックに改宗した様子が描かれる。

⑬ スティーヴン・デダラス(U-Y 10.408-11)

フリート通りを右折し、ベッドフォード道路に入ったスティーヴンは露天商の台車で、古書を物色していると、セクション⑪で登場した妹のディリーから声を掛けられる。彼女は、先ほど父から得た金で買った「一ペニー」のフランス語入門書を手にしている。極貧生活の中でもフランス語を学びたいという妹の健気な姿に、スティーヴンは内心動揺するが、その素振りを見せないように「マギーに質に入られないようにしろよ」（セクション④）とだけ告げる。

⑭ サイモン・デダラスとおっさんカウリー(Father Cowley)とベン・ドラード(U-Y 10.411-15)

下オーモンド河岸（リフィー川北岸）でサイモンは、カウリーとばったり出会い、彼がユダヤ人のルーベン・J・ドッドからの借金が原因で立ち退きを迫られていること、そしてそれが法的に無効であることを証明すべく、ベン・ドラードと待ち合わせをしていることを知る。やがてドラードがやって来て、カウリーの大家はセクション⑧に登場した、「田舎の牧師」ラヴ師であることが判明する。3人は、第11挿話の舞台であるオーモンド・ホテルに向かう。

▶**ロバート・カウリー**：愛称はボブ。高利貸しのドッドに借金の返済を迫られている。第11挿話ではサイモンンの伴奏をする。

▶**ベンジャミン・ドラード**：愛称ベン。事務弁護士のため、カウリーに法的な助言をしている。第11挿話で「クロッピー・ボーイ」を低音（バス）で歌う。

⑮ マーティン・カニングムとジャック・パワーとジョン・ワイズ・ノーラン(U-Y 10.415-18)

ダブリン城を出たカニングムとパワー、そしてノーランはディグナム家の遺児たちのために援助金を募ろうとしている（セクション①のコンミーが想起する手紙の意味が判明するとともに、ブルームが5シリングの寄付をしていることが明らかになる）。議会通り沿いのジェイムズ・キャヴァナーのワインルームの前で、市書記官補のジミー・ヘンリーに、酒場で副執行官のジョン・ファニング（長棹ジョン）と出会い、カニングムは寄付を募ろうとするが、その反応は芳しくない。彼らのいる店の前を総督の馬車が通り過ぎる。

▶**マーティン・カニングム**：アイルランド総督府の役人で裁判所に勤めている。博識で、聡明であるが、アルコール中毒の妻を持つ。

▶**ジャック・パワー**：カニングムの友人で、アイルランド警察で働く気さくな人物。

▶**ジョン・ワイズ・ノーラン**：カニングムの友人で遊び人。妻は牛乳店を営んでいる。

第10回 2022年の『ユリシーズ』—スティーヴンズの読書会（2021年2月21日）

Plot and Summary: Ep. 10: Wandering Rocks

⑯バック・マリガンとヘインズ(U-Y 10.419-21)

デイル通り33番地のダブリン・ベーカリー・カンパニーの喫茶室で、マリガンとヘインズが「メランジェ二つ」と「スコーンとバターとケーキ」を食べる。店内の彼らの反対側にはC・S・パーネルの兄、ジョン・ハワードがチェスをしている。マリガンがスティーヴンのハムレット論を聴くべきだったとヘインズに言うと、ヘインズは「シェイクスピアは精神の均衡を失った連中にはもってこいの獵場だからと言い（その直後に肉体の均衡を奪われた「一本足の水兵」がネルソン通りの凹庭に向かって「イングランドは期待する」とがなる）、ふたりはスティーヴンについて話をする。「地獄の幻影取り憑かれちまって。……それがあいつの悲劇だ。詩人にはなれないね」と彼を断じるマリガンは、嘲笑するかのようには高笑いをして「十年後には何か書くだらう」と言う。

⑰キャッセル・ボイル・オコナー・フィッツモリス・ティズダル・ファレルと生若い盲人(U-Y 10.421-22)

クレア通りからメリオン広場沿いに続く道（北通り）を、ダブリンの有名な〈奇人〉キャッセル・ボイルが歩いてゆく。彼は北通りとホリス通りとの交差点に「ルイス・ワーナー氏の朗らかなウィンドウまで歩き」、来た道を引き返すように、クレア通りへと「大股に」戻っていく。クレア通り2番地の「ブルーム歯科医の前を通り過ぎたとき」に彼のダスターコートが、大学公園の塀沿いの道からクレア通りを歩いていた、第8挿話でブルームが道を横切るのを手助けした「生若い盲人」の杖にぶつかり、彼はボイルに向かって罵りの言葉を吐く。

⑱パトリック・アロウイシャス・ディグナム君(U-Y 10.422-24)

ウィックロウ通りを歩く故ディグナムの長男、パトリック・ディグナムが描かれる。マリガンの店で豚肉を買うという使い（セクション⑨）から戻る彼は、帽子店のウィンドウに貼られたボクシングの試合を告知するポスターに目を奪われるが、既にその試合は「五月二十二日」に終わっている。グラフトン通りからナッソー通りへと歩きながら、学校帰りの生徒たちを眺め、自分が月曜まで忌引きで休むこと、そして死んだときの父のことを思い出す——「もう会えない。それが死ぬってことなんだ」。

▶パトリック・アローイシャス・ディグナム：愛称はパッツィ。ディグナムの息子。



“Grafton Street in all its glory”, circa 1903 (*National Library of Ireland on The Commons*)

第10回 2022年の『ユリシーズ』—スティーヴンズの読書会（2021年2月21日）

Plot and Summary: Ep. 10: Wandering Rocks

⑩アイルランド総督、第二代ダドリー伯爵ウィリアム・ハンプルとダドリー令夫人(U-Y 10.424-29)

フェニックス公園の公邸 から、ダブリンの中心部を抜け、ボールズブリッジの慈善市の会場へ向かうアイルランド総督とその夫人が描かれる（セクション⑩の挿入部に最初に現れる総督であるが、史実ではこのマイルス・バザーが開かれたのは、1904年5月31日であり、その開会式に総督は出席したものの騎馬行列は行われなかった）。

▶ウィリアム・ハンプル・ウォード（1867～1932）：第二代ダドリー伯爵。1902～06年まで、アイルランド総督を務めた。総督の騎馬行列の行程は以下の通り：フィーニクス公園内の公邸→公園の下手門→キングズブリッジ→リフィー川北岸→グラッタン橋→議会通り→デイルム通り→カレッジ・グリーン→グラフトン通り→ナッソー通り→レンスター通り→クレア通り→メリオン広場北通り→ロウアー・マウント通り→グランド運河→ノーサンバーランド道路→ボールズブリッジ

※なお、本あらすじの作成に当たっては、以下の文献を参考にした。

Gifford, Don with Robert J. Seidman. *Ulysses Annotated: Notes for James Joyce's Ulysses*. 2nd ed, U of California P, 1988.

Joyce, James. *Letters of James Joyce I*. Edited by Stuart Gilbert. Faber, 1957.

Killeen, Terence. *Ulysses Unbound: A Reader's Comparison to James Joyce's Ulysses*. 2004. 2nd ed, Wordwell, 2012.

ジョイス、ジェイムズ『ユリシーズ』II、丸谷才一・永川玲二・高松雄一訳、集英社文庫、2003年。

結城英雄 『「ユリシーズ」の謎を歩く』集英社、1999年。